

平成26年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

法文学部 国際言語文化学科 ヨーロッパ文化専攻

注 意 事 項

1. 受験番号を解答用紙の所定の欄に記入すること。
2. 解答は、必ず解答用紙に記入すること。
3. 解答用紙の他に、下書き用紙を配付するので、取り違えないように注意すること。
4. 解答時間は、150分である。
5. 横書き、鉛筆（シャープペンシルを含む）書きにすること。

問 題

次の文章は作家永井荷風の小説『ふらんす物語』のうちの一章「蛇（へび）つかい」からの抜粋です。この文章を読んであとに示す問 1、問 2 に答えなさい。

一

非公開

二

非公開

非公開

(永井荷風『フランス物語』, 新潮社, 一九五一年, 四十～四十六ページ, 抜粋, 一部改変)

注記) 上記の文章は永井荷風のフランス滞在をもとにした物語です。荷風は横浜正金

銀行（東京銀行を経て現東京三菱銀行）リヨン支店勤務を命じられ、それまでいたアメリカから1907年に渡仏しました。本文中の叙述はフランス南部最大の都市リヨン近郊でのものです。荷風はフランスに10か月、リヨンには8か月滞在しました。

本文中で話題になる「ヴォーグ」のことですが、これはフランス語で「教会の縁日のお祭り」を言い、屋台店や見世物小屋が立つのだそうです。そして屋台店や見世物小屋を出しながら町から町へと移動する仕事に従事する人々が、かつてジプシーあるいはボヘミアンと呼ばれる人たちだった時代がありました。

問1 課題文で作者は、ジプシーあるいはボヘミアンのことを長々と紹介していますが、この人たちは作者にはどう思われていたのか。200字以上、250字以内で答えなさい。

問2 課題文は、日本の作家の海外体験に基づく話です。それはかおり高い日本語で書かれています。さて、もしあなたが留学したとして、留学先で日記あるいはエッセイを書くことになると考えてみてください。あなたはあなたの海外体験を日本の読者を想定して日本語で書きますか。それとも、ドイツ語、フランス語、スペイン語など留学先のことばで書きますか。あなたの選択とその理由を900字以上、1200字以内で論じなさい。なお、これに関連する先人の事例について知るところがあれば、具体例を挙げて、論を補強しながら書きなさい。

平成26年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

法文学部 国際言語文化学科 ヨーロッパ文化専攻

出題の意図

この小論文の出題の意図は、ふたつあります。日本の作家が海外で見聞したことや風物などをもとにつづった文章を読ませますが、まず、そこから作者のものの見方がどのようなものであるか、本文から読み取らせませす。読解力をみることとなります。

次に、学生が海外留学した場合に、その体験を日本語で表すか、それとも留学先のことばで書くのかを尋ねます。いずれのやり方をとるにせよ、いかに自身の能力あるいは見識を発展させようとしているか、それについて説得力ある論を展開できるのかが問われます。

かつて外遊の体験は作家、学者のエッセイをはじめ、ジャーナリズムの第一線で紹介され、ためにその文章は大いに推敲され、日本文学、日本文化の発展に貢献しました。そして、今回出題のテキストもそのひとつです。今日、グローバル化により、旅行者はもちろん、留学生の数も膨大なものがあり、留学に限って言えば、あちこちに留学体験記が書きなぐられ、留学情報もちまたにあふれています。そういう経緯から、ヨーロッパ文化専攻を志望する受験生に対しては、留学体験は日本語で書く意義はありますか、むしろ留学先のことばで書いた方がよいのではありませんか、と尋ねようと思った次第です。ただし解答のいくつかには、日本語・日本文化の理解なくして外国語・外国文化の理解はあり得ない、とする立論も想定されるところであり、こちらにも少なからず期待しています。

本専攻のアドミッション・ポリシーにある、ヨーロッパ文化への関心と、情報を整理・分析し、独自の論を展開する能力を測るための出題です。